

# エストニア現代史をめぐる論争

オラフ・メルテルスマン

エストニア現代史、特に1939年から53年の歴史はしばしば、幅広い論争的话题について議論する機会を政治家やジャーナリストに与えており、それらが感情的重石となって、今日のロシアとエストニアとの関係に影響を及ぼしている。それらの論点は多くの神話と伝説、明白な捏造を含んでおり、なかにはまじめな歴史家によってしばしば引用されるものもある。現代史をめぐる論争は双方の社会を巻き込んでおり、一見したところでは、それらの事件をめぐる「エストニア的」解釈と「ロシア的」解釈が存在するかのよう印象が強い。異なる記憶の文化が一役買っているようにも思える。しかし実際は、学問的研究の場では架橋不能ほどの対立が存在するわけではない。われわれがここで扱うのは、歴史をめぐる対立であって、専門的歴史家のあいだの対立ではない。もちろん、それほど質の高くない無名の歴史家のなかには、ジャーナリスティックな文書で論争に加わる者もいるし、議論を沸騰させるために政府に雇われ、金を受け取る者も時にはいる。この論争のなかで、もっとも重要な論点はどのようなもののだろうか。単なる列挙にとどまるかもしれないが、以下の諸点を挙げることができるだろう。

## ①1934年に確立した戦間期権威主義体制の性格

この体制は、どのように権威主義的ないし独裁的だったのだろうか。ファシスト体制に近く、ドイツ寄りのものとして特徴づけられる場合もある。この点は、エストニアが1940年8月にソ連邦に自発的に加入したと主張する場合に、重要な側面をなすものである。他方、エストニアで民主主義の放棄されたのは1940年ではなく、それに先立つ6年前のことであった。権威主義体制を矮小化しようとする傾向も存在する。

## ②1939年と1940年の事件

ソ連期とは異なり、独ソ不可侵条約秘密議定書の存在が否定されることは、今ではもはやない。だが、1939年のソ連軍部隊の進駐と1940年のソ連邦への併合は、引き続き論争的となっている。歴史家として私は、エストニアとロシアの文書館にある既

知の文書から得られる解釈の方向性は一つしかありえない、と付け加えるべきであろう。1939年のソ連軍部隊進駐は、ソ連邦がすでにポーランド東部に侵攻した後の恫喝と脅威の結果であった。1940年夏には、ソ連による二度目の最後通牒が発せられたし、駐留兵士数の増大は、實際上、軍事占領であった。ソ連に友好的な傀儡政権が樹立され、1940年8月の併合は民意に反して生じたものであった。重要なのは、1939年から41年の事件だけではなかった。エストニア側は1991年まで継続されるソヴィエトによる占領と捉え、モスクワ側は「下からの革命」ないし自発的加入という古い神話をしばしば利用するが、これらに対してわれわれは、双方の解釈をその政治的文脈の中で見なければならぬ。

### ③ドイツによる占領、対独協力、ホロコースト

1941年から44年にかけてエストニアはドイツに占領された。居残っていたほとんどすべてのユダヤ人がこの時期に殺害され、地域住民がこれに手を貸した。この事実には疑う余地はないし、エストニア人の歴史家と特別国際委員会がこの件について調査を実施している。ロシア側は、戦後のスターリン主義的迫害の広がりやをどうにか正当化するために、対ナチ協力やホロコースト関与を利用して、ドイツ人がバルト諸国における「自然発生的ボグロム」に着火することを望んでいたことは、「行動部隊」報告書から判明している。だが実際にはエストニアでは、これは発生しなかった。多くのエストニア人は「対ナチ協力」「より小さな悪」だと論じている。迫害の規模は、スターリンのもとよりヒトラーのものとほうが小さかったのだが、だからといって、武装SSに属して闘ったエストニア人を「自由の闘士」とみなすことができるだろうか。この件は、なお論争中である。

### ④戦争終結—解放か再占領か

エストニア人にとって1944年の赤軍到来は、1991年まで継続されるソ連による二度目の占領の始まりと見なされている。スターリン期には過剰なテロルが行使された。実際、1944年から45年にかけての15ヶ月間にわたって、最大級の粛清の波が発生した。スターリン期の政治的理由による逮捕の4分の1以上がこの時期に起こったのである。他方、ロシア側にとって1944年は、ナチス占領からのエストニアの解放を画する年であった。

### ⑤スターリンのテロル

スターリンがエストニアで行使した手段には迫害、粛清、拷問、無実の人々の逮捕、

大量強制移住、大量殺害、民族浄化、民間人に対する犯罪が含まれた。一般に、ロシア側公式機関もスターリン主義の犯罪性は否定していない。それらは、記憶の文化とナショナル・アイデンティティの中核的な事柄となったし、特に大量強制移住はそうであった。テロルの規模は論争中であり、犯人を追跡すべきかどうかという問題もある。スターリン的な殺戮者と大量強制移住の組織者はエストニアで訴追されうるし、何件かの有罪判決がすでに下された。他方、その人物がロシア側で「反ファシスト抵抗者」と呼ばれる場合があった。

#### ⑥記念碑その他の記憶の場

エストニアでは多くの墓地やほとんどすべての街で、ドイツからの解放者の記念碑や、それ以外にもソヴィエト的意味をはらんだ記念碑が見られる。その絶対数の多さを考えると、スターリン主義の犠牲者やドイツ側に与した人々が自分たちの記念の場を要求し、ソヴィエト的記念碑が除去されるのは、了解可能なことである。こうした文脈のなかで、おおよくの場で過熱化した諍いが始まり、エストニア人とロシア人とのあいだの衝突さえ生じて、警察しか手をつけられないほどの場合が時折見られた。その一例は、一年にわたって継続したタリンのソヴィエト記念碑 [ブロンズの兵士像] についての論議である。エストニア政府が2007年4月に記念碑を移動させる意図をはっきり示した際には、示威行動がエスカレートし、タリン旧市街での二日間にわたる暴動にまでおよんだ。すでにその第一夜に政府は記念碑を撤去して、それを軍人墓地に再建することを最終決定していた。

歴史的な神話・伝説・捏造はいかにしてエストニア現代史に入り込んだのだろうか。

第一に、伝説と神話は歴史におけるナショナルな語りにつきものの構成要素である。エストニアでは、ナショナルな語り以外のさらなる要素が原因になっている。文書館文書それ自体が、必要な史料批判を抜きに読んだ場合、その一つの理由となる。神話と伝説が存在するもう一つの理由は研究史にある。当初からソヴィエトは、メディアその他の刊行物のなかで事件とその展開の表象を操作してきた。ドイツ占領期には、ソヴィエト支配の初年についての書物が『エストニア人民の苦難の年』というタイトルのもと刊行された。バルト諸国の亡命歴史家たちは、母国にいるソヴィエト化された同僚と比べて、少なくとも現代史については有利な立場にあったし、情報も十分に与えられていた。しかし、彼らもまたある程度神話や伝説を振りまいた。亡命歴史家は英語やドイツ語で多く出版したので、西欧で影響力を持つようになった。1980年代末以降は、エストニア語の歴史書が戦争とスターリン時代を広く扱うようになった。

当初、歴史の「空白」が探究されるはずであった。民族主義的雰囲気は繰り広げられ、著者たちが「犠牲者競争」に参入する場合もある。新しいナショナルなメタの語りを確立しようと努力する出版物も存在したが、1990年代中頃以降は質的水準が上昇している。構築主義的批判は脇に置くとしても、エストニアの研究史はここで検討している時期の扱いについて、かなり改善されてきた。

政治は時代の影響をうけるものだが、これもまたエストニア―ロシア間の歴史論争に独自の役割をはたしている。この分野では問題は、歴史学よりはむしろ道具化された歴史政策である。ロシアの場合、第二次世界大戦の勝利神話とソヴィエト史の積極的側面を前面に押し出すことが、アイデンティティ育成にとって重要である。他方、エストニアは独自の見方を促進するのにきわめて成功した。社会も忘れてはならないだろう。ロシア語話者マイノリティは、さまざまな政治アクターによって道具化されてきたように思われる。しかし、人々は自身の記憶と歴史理解をもつものである。各人それぞれの見方が神話と伝説との組み合わせや敵のイメージをもたらすが、われわれはまた、歴史をもっと多様に見たいという要求にも出くわす。若い世代は年長世代とは異なり、後者より鷹揚な見方を持つ場合がよくある。さらに、ソヴィエト支配が終結したのはやっと1991年のことであって、その記憶は第二次世界大戦のそれと比較して、なお生々しい。

エストニア現代史論争は、メディアやインターネットにも分岐して生じている。ロシアのホームページのいくつかは、「正しい」見方を表現するための国家支援を受けている。近年では、例えばニュース配信「レグナム」(www.regnum.ru/)が、「エストニアの戦争記念碑」あるいは「エストニア・ラトヴィア・リトアニアにおけるファシスト的態度」と題したファイルを公表した。これらのファイルを読むと、エストニアその他のバルト諸国がプロパガンダ的攻撃のやり玉にされたことが理解される。

タリンの記念碑撤去の可否が議論された際にロシア下院は、「ファシズムのプロパガンダ」を支援しているとしてエストニア当局を非難した。ロシアの新聞雑誌では、一部ジャーナリストがロシア語話者マイノリティの命運を歴史論争に関連づけ、エストニアは民主主義国家かどうかを問いかけた。一般向け記事の中でロシアの歴史家レオニード・ムレーチンは、バルト諸国に対するロシアの態度をこう特徴づけている。「バルト三国は小さくうらびれたほとんどファシスト国家であり、ロシアを憎み『外国人』[ロシア語話者住民]を二級階級だと宣言している。率直に言おう。バルト諸国は、三つの理由から愛されない。第一に、彼らは真っ先にソ連を去った。『恩知らず!』第二に、彼らは自分たちを西側の一部だと考えて、慌ててヨーロッパ連合とNATOに加盟しようとした。『敵に加勢するのか!』第三に、彼らは『占領』期間に

ついて領土的・財政的要求を出している。それ以外にも何もかもが、ロシア人がそこにいることに不満を抱いている結果なのである。」<sup>1</sup>

2007年2月にモスクワでは、バルト諸国による歴史告発への対応を議論するために、歴史家「円卓会議」がもたれた。このグループの結論と勧告は示唆的である。バルト諸国の歴史家は第二次世界大戦史を書き替え、ソ連邦とロシア国民に攻撃者の役割をかぶせようとしている、というのである。ソヴィエトの「占領」という捉え方が彼らによって強化されている。ロシア政府は歴史を歴史家任せにすべきではなく、「歴史上の重要問題にたいして国家の政治的立場をはっきり」と表明すべきである。独ソ不可侵条約は再評価されるべきであり、1989年以降の否定的評価は正される必要がある。バルトの歴史家の圧倒的多数は国家に依存しており、バルト諸国政府によるエセ歴史学的議論とロシア系マイノリティ差別を支援している。言いたい放題にさせないためには、文書館へのアクセスが制限されるべきである。バルトの歴史学研究には教条主義の傾向があり、自分たちのイデオロギー的世界観に合致しない文書と事実を無視している。可能性として一つあるのは、大規模な調査研究と出版企画であろう。こうしたことが、「円卓会議」による提言だったのである<sup>2</sup>。

エストニア歴史委員会と歴史家、エストニアの歴史と記憶の政治は、批判されてもしかたのないような機会を多く提供している。全出版物が方法的に妥当な高い質を備えているわけではない。ロシアとロシア人があまりにも否定的な光の当て方をされて表現されることもしばしば見られる。しかし、論争中でソヴィエト的捏造を用いようとするクレムリンのやり口は、歴史政治の機微がよく理解されのかどうか、そうした疑義をいだかせる。

歴史論争中では政治と伝説を背景に退かせるのがよいだろう。歴史上の出来事はより多くの複雑なものはらんでおり、より多様な解釈を必要とするということ、このことを想起しておくのが適切である場合がよくある。特に、1940年代と50年代の事件や展開を歴史化することだけが、歴史をめぐるエストニア＝ロシア間の論争にみられた「交通封鎖」を克服する機会を提供してくれる。エストニアとロシアの社会と政治家が近過去の歴史化をできるだけの成熟を遂げているかどうかによって問題は異ってくる。現代史をめぐるエストニア＝ロシア間の対立の場合、論争は主として政治的起源をもつと筆者は考えている。

(橋本伸也訳)

〈註〉

1 LEONID MLETŠIN: Venemaa ja Baltimaad mineviku vangis, in: Postimees - Arvamus, 31

March 2007, p.4; Russian original, Rossiia i Pribaltika: v plenu proshlogo, 22 March 2007, <http://rian.ru/analytics/20070322/62433429.html> (10.08.07)

- 2 Rekomendatsii rossiiskikh istorikov: “Rossiia i Pribaltika: kompetentnye otvety na istoricheskie pretenzii limitrofov”, in: IA Regnum, 2 May 2007, <http://www.regnum.ru/news/821909.html> (10.08.07).